

## 言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 烏雲畢力格

論文題目 歴史と民族の創成——17世紀モンゴル編年史における民族的アイデンティティの形成

論文審査委員 糟谷 啓介教授、松永 正義教授、イ・ヨンスク教授

### 1. 本論文の内容と構成

本論文は、元朝崩壊以降の約300年間のモンゴルの歴史を、「帝国としてのモンゴル」から「民族としてのモンゴル」への移行が起こった時代であるにとらえ、その過程を17世紀に作成された四つの編年史のなかに探ろうとする野心的な研究である。本論文の構成は以下の通りである。なお、節以下の見出しは省略した。

#### 第1章 序論

第1節 はじめに——「モンゴル・オルス」という視座

第2節 問題提起——「モンゴル・オルス」

第3節 先行研究の概観

第4節 研究の仮説及び研究の方法

#### 第2章 「黄金家族」の歴史としての編年史

第1節 四部の編年史

第2節 「黄金家族」と仏教

第3節 語りかける編年史

#### 第3章 「大モンゴル」の蘇生と仏教の導入

第1節 大元オルスの記憶——二つの喪失

第2節 モンゴルの期限に関する新たな神話の誕生

第3節 神聖なる宗教とモンゴル民族の起源記憶

#### 第4章 結論

モンゴル年表

チベット年表

参考文献

### 2. 本論文の概要

第一章では、従来の研究成果を検討しつつ、「モンゴル・オルス」という視座をとることの重要性が述べられる。従来の歴史書、とりわけ中国側から見た歴史では、元朝崩壊以降のモンゴルを「北元」あるいは「明代蒙古」として扱うことがある。また、欧米の研究書では「暗黒の時代」として描かれるときもある。しかしこうした見方はかなり一面的であり、歴史的主体としてのモンゴルの存在を無視するものであるとされる。その代わりにとりあげられるのが、「モンゴル・

オルス」という視点である。「オルス (ulus)」とはモンゴル語で国ないし国家を意味する語であるが、それはもともと「人々」を表すことばである。つまり、モンゴルの「オルス＝国家」にとって重要なのは領土ではなく、人間集団の強固な結合であった。そうした点から、「モンゴル・オルス」に対して定住民的な国家概念をあてはめることはできないことが指摘され、14世紀後半から17世紀半ばまでの歴史を「モンゴル・オルス時代」と呼ぶことが提案される。

さらに、草原を絶えず移動するモンゴルの「行国」のあり方を理解するには、「声の歴史」の視点が必要であるとされる。草原の語り部たちが伝えたのがチンギス・ハーンの「黄金家族」の英雄物語であり、その延長線上に17世紀に編纂された四つの編年史がある。これらの編年史の特徴は、チンギス・ハーンの「黄金家族」の系譜をブッダと結びつけることによって、「黄金家族」と仏教が重なり合うような二重構造を編み出し、それによって「モンゴル・アイデンティティ」を強化することであった。実は、このようなアイデンティティ意識は、中国、ペルシア、中央アジアというモンゴル帝国の広範な領土が失われていくプロセスのなかで形成された。この喪失感、四部の編年史のなかにはっきりと現れており、モンゴルの新たな民族起源神話を生み出した。

第二章では、17世紀に編纂された四つの編年史がとりあげられ、そこに描かれた「黄金家族」の物語が分析される。その編年史とは『蒙古黄金史』『蒙古源流』『シャラ・トージ』『アルタン・トブチ』である。これらの編年史はそれぞれ特徴をもつが、人間世界の形成に始まり、古代インド、チベットの王統を論じ、インド、チベットの王族とチンギス・ハーンの一族である「黄金家族」をブッダに起源をもつものとして論じている点では共通している。つまり、歴史を語るための前提として、「黄金家族」と仏教を関連づけようとしているのである。このように「黄金家族」を中心に歴史の連続性をとらえる見方は、13世紀にオゴディ・ハーンの命により編纂された『モンゴル秘史』のなかにすでに現れており、それがモンゴルの歴史記憶の基本的パターンとなった。根本思想は「黄金家族」に対する讃歌であり、昔からモンゴル草原において伝承されてきた伝説や神話が「黄金家族」を中心に束ねられていった。その目的は「大モンゴル帝国」の支配を正当化することであった。それに対して、17世紀編年史の編纂は皇帝による国家事業ではなく、草原の知識人の自発的な編纂行為だったという点、そして歴史を仏教の布教に有利なように修正を加えていった点に違いがある。編年史を編纂した知識人たちは、チベット仏教という外来の宗教とモンゴル固有の祖先崇拝を合体させたのであり、それは彼らなりの民族的アイデンティティの表出行為でもあった。全体的に見て、17世紀の編年史には、仏教によって「黄金家族」の威厳を回復することで統一国家を守ろうとする意識が明瞭に現れている。

第三章では、編年史を特徴づける語り、すなわち、「40万モンゴルの喪失」と「仏法の喪失」という「二つの喪失」についての語り分析される。「二つの喪失」のうち、前者は中国を追われたモンゴルが被った人的損失であり、後者は精神的・理念的損失であった。これらはいずれも元朝崩壊によってモンゴルに襲いかかった悲劇としてとらえられ、この「喪失」を取り戻し、衰退した「黄金家族」を再興させることが、それ以後のモンゴルにとっての歴史的使命となった。とくに17世紀の編年史が目指したのは、「黄金家族」を仏教の立場から再解釈し、「政と教」を等しく実行する理念を再確立することであった。

しかしその一方で、「大モンゴル帝国」の崩壊はモンゴルに新たな局面をもたらした。モンゴル帝国は中国とペルシアという二つの古代文明に対して征服王朝として臨んだが、フビライ以降、根拠地であるモンゴリアからの影響力は各地に届かなくなり、各カン国は独自の歩みをとりはじめた。17世紀になると、西側のカン国はイスラーム世界に溶け込んでいった。モンゴル帝国が派遣した軍事集団はしだいにエスニック化するに至ったが、それらの集団が「モンゴル」として存続しえたのは、「黄金家族」を中心とした理念とチンギス・ハーン祭祀が基礎にあったからであった。つまり、大モンゴル帝国のなかから「モンゴル」として生き残ったのは、チンギス・ハーン祭祀に関係したいくつかの集団だけであった。

こうしたなかで「民族としてのモンゴル」の内部にチベット仏教の影響力が深くきざみこまれていく。モンゴルが仏教に最初に接触したのはチンギス・ハーンの時代であるが、そのときの仏教はチベット仏教ではなく中国の禅宗であった。チベットのラマ教を選択したのはフビライの時代になってからであり、フビライはモンゴル、漢、チベットの三つを仏教という枠組みでくくることを考えていたが、この時代のチベット仏教はいまだ皇室の宗教にとどまっていた。チベット仏教をモンゴルに本格的に導入したのは、16世紀後半のアルタン・ハーンの時代である。アルタン・ハーンは明朝との和解を目指すと同時に、チベット仏教ゲルク派をモンゴルに取り入れた。そして1578年に、チベットの高僧ソナム・ギャムツォに「ダライ・ラマ」称号を送り、彼は転生した「三世ダライ・ラマ」となった。この三世ダライ・ラマが亡くなると、四世ダライ・ラマが黄金家族の家系に転生した。これによって、チベット仏教と黄金家族は血縁的にも結び付けられ、大元オルス以来のモンゴルの「二つの喪失」の記憶は補われることになった。

結論では、黄金家族とチベット仏教を結びつけた17世紀の四つの編年史は、モンゴルの歴史家たちの自覚的な歴史刷新の作業であったことが強調される。これ以後「チンギス・ハーンとチベット仏教の合体」がモンゴルの民族的アイデンティティの象徴となっていくことが言及されて、論文全体の結びとされる。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の通りである。

(1) 四つの編年史を初めとする一次資料に対して、堅実な実証的態度が一貫して保たれていることは、本論文の大きな長所である。とくに、四つの編年史の個々の特徴をとらえたうえで、それらを貫く歴史認識を抽出したことは、大きな成果である。また、これまでのモンゴル研究の成果を十分に消化したうえで、モンゴル語、中国語等の多方面の資料を検討して立論に及んでいることが、本論文の学問的水準を確保している。

(2) 14世紀後半から17世紀半ばまでの「モンゴル・オルス時代」を「帝国としてのモンゴル」から「民族としてのモンゴル」への変容が起こった時代としてとらえ、17世紀編年史の歴史的位置に着目した著者の独創性は、高く評価されるべきである。とくに、この視点から見たモンゴルの民族的アイデンティティの変容過程に関して、論理展開や文献資料の分析の点からみて、十分に説得的な議論が展開されている。

(3) 上の点と関連するが、チンギス・ハーン信仰とチベット仏教という、いまでも「モンゴル」

といえすぐに連想されるような文化要素は、実は 17 世紀以降「民族としてのモンゴル」が形成されるなかで歴史的に作られたことを実証的に示したことである。ある意味で著者は、E・ホブズボームと T・レンジャーが『伝統の創成』で展開した議論を、モンゴルという舞台に移してより雄大なスケールのもとで繰り広げ、実り豊かな結実をもたらしたといえよう。また、本論文のなかには、さらに発展させることの可能な論点が数多く含まれており、その点からも本論文を土台としてさらに研究を進めることが望まれる。

しかし、本論文にも問題点がないわけではない。以下のことが指摘できる。

(1) 「モンゴル」の民族的アイデンティティの形成を論じることが主題であることから来ると思われるが、「モンゴル」内部の変容を詳細に論じている反面、それぞれの時代の国際関係に関する議論は若干手薄である。そうした要素を組み込んだならば、さらに複眼的な叙述が可能になり、より充実した議論を進めることができたと思われる。たとえば、明朝や清朝との関係、17 世紀以降のロシアとの関係、高麗や朝鮮王朝との関係について、さらなる研究を期待したい。また、モンゴルとチベットの関係についても、モンゴルの視点からだけでなく、チベット側から見たモンゴルとの提携の意味についても論じることができたであろう。

(2) 17 世紀の編年史が草原の民族の「声の歴史」にさかのぼるという認識が、本論文の独創性の基礎となっており、そのことは評価できる。しかしそれでは、17 世紀編年史が「黄金家族」とチベット仏教の合体と目指したということと、古来の伝承がシャマニズム的信仰を基礎にしていたことには、どのような関係があるだろうか。言い換えれば、伝承されてきた多様な伝説や神話が、編年史編纂の過程で仏教的要素と矛盾なく接合されたとすれば、伝承そのものにどのような変容がもたらされたのだろうか。この問題に関して、さらに突っ込んだ検討がなされてもよかったであろう。

(3) もうひとつ付け加えれば、編年史で語られている内容は丁寧に分析されているが、編年史で用いられた語彙、文体、表現法についての詳しい分析がなされているとはいえない。もしそうした分析を行っていたならば、編年史を特徴づける「声の文化」の特質をさらにはっきりと示すことができたであろう。

けれども、こうした弱点があるにせよ、本論文が優れた研究成果であることには変わりがない。本論文が斬新な視点のもとに充実した議論と実証を行なったことは、いくら高く評価してもしすぎることはない。ここで論じられた、民族的アイデンティティの形成における歴史記述の役割や民族の記憶の形成と変容の問題は、一般的な理論のレベルでもとりあげることでできる視座を提供している。これらの点から見て、本論文は実証性と理論性、個別性と一般性の間で見事なバランスを保った優れた研究であるといえる。総合的に見て、本論文の学術論文としての高度な質は、著者が研究者として優れた能力をもつことを証明している。

#### 4. 結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第 8 条 1 項の規定により一橋大学博士(学術)の学位を受けるに値するものと判断する。

## 最終試験結果の要旨

平成 21 年 6 月 10 日

受験者：烏雲畢力格

最終試験委員：糟谷 啓介、松永 正義、イ・ヨンスク

平成 21 年 5 月 27 日、学位請求論文提出者 烏雲畢力格 氏の論文および関連分野について、本学学位規則第 8 条第 1 項に定める最終試験を行なった。本試験において、審査員が提出論文「歴史と民族の創成——17 世紀モンゴル編年史における民族的アイデンティティの形成」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、烏雲畢力格 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、烏雲畢力格 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。